

吉井源太と明治

《28》

教えを請う人々

吉井源太のまわりでは、新しい器具の使い方や新しい紙の漉き方を習いに来る人、それらを教えに行く人が常に出入りしていた。

その最初になる出来事として履歴書に書かれているのは、明治九（一八七六）年に岐阜県恵那郡中村の松井利吉という人が、指導を求めてやって来たことであった。

この人は、源太の自宅に滞在して数カ月練習を積み、新しい紙の製造方法や改良器械等の事を習ったとされている。改良器械というのは、源太が開発した大型竈桁のことだ。

岐阜県は美濃紙の産地として日本で最も古い紙産地内の一だ。高知県同様、県内に和紙製造地域がいくつもあった。美濃和紙産地と

して最も盛んだったのは、岐阜市から見て北の山間地域になる武儀郡というところ。恵那郡は、岐阜市から木曾川沿いに東へ行った、長野県に近い地域になる。

伝統的な和紙製造においては武儀郡ほど盛んではなかった。明治時代になって新しい和紙を積極的に取り入れようとしたのかと思われる。

同十二（一八七九）年には、愛知県加茂郡の土居幸四郎ほかの人々の招きに応じて、長男洋助を遣わして改良製紙の方法を指導させた。この洋助という人は、詳細は不明ながら、この三年後に亡くなることになる。わずかに残されている書簡によれば、土居幸四郎から大変信頼を受けていたようで、その死により人

々は大変なショックを受けたようだ。もちろん源太の心痛は計り知れないものだっただろう。

う。その後の日記にも「洋助年忌」のことが区切りの年ごとに書き込まれている。



高知市浦戸かいわい。源太の日記には京阪神などへ向かうとき、ここから船をよく利用したと記されている

同十六（一八八三）年には、山口県から製紙教師三人を招へいしたいという依頼を受け、小路楠馬ほか二人の人を派遣することにした。これらの三人には県内をくまなく巡回してもらった。これにより製紙が山代地方全域に及び、人々の生業をたすけたと伝承されている。住民は與左衛門を紙生産隆昌の守り神として楮祖神社にまつたというのである。

この神社についてわかった内容は履歴書や日記に書かれていないが、「楮祖神社」のことだったと思われる。山口県玖珂郡本郷村、現在では岩国市となっているところにある。島根県に近い山間のところだ。

和紙の産地であり、産出される紙は「山代紙」とし

てその名が知られていた。この山代紙は、本郷村の住人であった中内與左衛門が、この地方に適する楮を試植し、紙を漉いたのが始まりとされている。永禄八（一五六五）年のことで、

これにより製紙が山代地方全域に及び、人々の生業をたすけたと伝承されている。住民は與左衛門を紙生産隆昌の守り神として楮祖神社にまつたというのである。

源太の明治三十六（一九〇三）年の日記には「山口県 楮神社 中内氏履歴」という言葉が書かれている。しかし、現在では、この中内與左衛門というのは支配者側の人間であったという研究もあるようだ。（京大大学院研修員、京都府在住）

「土佐紙業の恩人」没後100年 村上 弥生